

「いらっしやいませ」

愛想のかけらもない声が、カランコロンというドアベルの音に続いて聞こえてくる。私はいつものように、カウンターの奥に立つ彼に向かって満面の笑みを浮かべた。

「さっくん、今日もかっこいい〜！」

「……ご注文は」

「えー、無視？ ひどくない？」

「注文しないなら帰って」

「するする！ いつものやつ！」

茶色の髪に黒い瞳。カフェの店員にしておくには勿体ないくらい整った顔立ち。無愛想で、笑わなくて、必要最低限のことしか喋らない。それなのにどうしてこんなに目で追ってしまうんだろう。半年前、このレトロな喫茶店に新しく入った大学生バイト——柊朔也、

二十歳。私の、推しである。

「はい、ブレンド」

「ありがと〜！さっくんが淹れてくれたコーヒー最高なんだよね〜」

「……どうも」

カップを受け取って席に向かおうとした時、カウンターの足元に何か落ちていたのが目に入った。

(……ペン？あ、これ……)

さっくんがいつも使ってるやつだ。エプロンのポケットから落ちたっぽい。

「さっくん、これ落ちてるよ」

拾って差し出すと、さっくんが受け取ろうと手を伸ばして——ふいに指が触れた。

(あ——)

大きい手だな、と思った。私の指がさっくんの手のひらの上にちよこんと乗っている。その大きさの差がなんだかおかしくて、気がついたら、さっくんの手を両手で包み込んでいた。

「さっくんの手、おっきいね。私の倍くらいある」

「……何して」

「さっくんと手繋いじゃった」

「繋いでない。あんたが離さないだけだろ」

「一緒じゃん」

「全然違う。——離せ」

「はい」

ぱっと手を離すと、さっくんはすぐに背を向けた。耳がほんのちよつと赤い気がしたけど、気のせいかもしれない。

(さっくんの手、あったかかったなあ)

自分の手のひらを見る。さっきまでさっくんの温度があった場所が、もう冷めかけている。なんだろう、ちよつとだけ寂しい。

(でもまあ、推しに触れただけで十分幸せだし！)

気持ちを切り替えて、カップを持っていつもの窓際の席に座った。

「朔也、彼女さん来てるのか」

バックヤードから、さっくんのおじいさんが顔を出した。このカフェのオーナーで、さっくんとは正反対の人当たりのいい人だ。白髪交じりの髪に、柔らかい笑顔。さっくんがこの人の孫だというのが、未だに信じられない。

「彼女じゃない」

「何言ってるんだ。毎日来てくれてるといふのに」

「……毎日来るのは関係ないだろ」

「おいおい、そんな言い方ないだろ。お嬢さん、すまないねえ。うちの孫は愛想がなくて」

「いえいえ、大丈夫です！そこも含めて好きなので！」

私がつこり笑うと、マスターも笑った。さっくんだけが、仏頂面のまま。

「朔也、お前もちよつとは素直になったらどうだ」

「……いつも素直だろ」

「まあまあ、マスター。さっくんはこれでいいんです。ツンデレなところも可愛いので」

「ツンデレって何だよ」

「さっくんのこと」

「……意味わかんない」

さっくんはそう言って、バックヤードに引っ込んでいった。その

背中を見送りながら、窓際の席で温かいコーヒーを一口飲む。

(美味しい。やっぱり、さっくんが淹れたコーヒーは最高に美味しい)

私がこのカフェに通い始めたのは、もう三年も前になる。会社から近くて、レトロな雰囲気落ち着くから、仕事帰りの息抜きにちょうどよかった。古い木のカウンター。年季の入った革張りのソファ。壁に飾られたアンティークの時計。マスターも優しいし、コーヒーも美味しい。ずっとお気に入りのお店だった。

そこに半年前、さっくんが現れた。

「新しくバイトに入った、孫の朔也です」

マスターがそう紹介した時、私は目を疑った。あの人当たりのいいマスターの孫が、こんなに無愛想な子？

「…………どうも」

それだけ言って、さっくんはバックヤードに消えていった。愛想のかけらもない。接客業に向いてないんじゃないかってくらい無愛想で。でも、コーヒーを淹れる手つきは丁寧で、お客さんの好みをちゃんと覚えていて。

私がミルク多めが好きだって言ったら、次から何も言わなくても多めにしてくれた。私がいつも窓際の席に座ることも、何も言わなくても分かってくれている。

言葉は少ないけど、ちゃんと見てくれてる。ちゃんと覚えてくれる。

そのギャップに、私はあつという間に落ちてしまった。

——後、単純に顔がものすごくく好みだったり……？

「私、さっくん推しだわ」

ある日、ついに本人を目の前にしてそう呟いた。

「……推しって何だよ」

「え、推しは推しだよ。好きな人！応援したい人！」

「……意味わかんね」

「だから、要するに……私はさっくんのことが好きなの！」

私がそう言うと、さっくんは面倒くさそうに息を吐いた。

「はいはい」

「はいはいつて何〜！本気なんだけど！」

「安い本気だな」

「違うよ、マジの本気！」

私がニコニコしながら言うと、さっくんはじっと私を見た。黒い瞳が、何かを探るように私の顔を覗き込んでくる。

（あれ……なんか、いつもと違う……？）

「……本気、ね」

「う、うん……」

「本気で好きなのに、『推し』なんだ」

「え？ 本気で好きだから推してるんだよ？」

「……………」

さっくんはそれきり黙って、カウンターの向こうに戻っていった。私は残されたコーヒートを啜りながら、首を傾げる。

（何か、気に障ること言っちゃった？ 「推し」が嫌だったのかな）

分からない。でもさっくん、なんかちよつと拗ねてた気がする。

（……拗ねてるさっくんも可愛い）

その時の私は、そんなことを思っていた。

それから毎日通った。毎日「推し」って言って、毎日塩対応されて。いつのまにかそれが、私の日常になっていた。

そんな日々が何ヶ月か続いていたある日、ふと気になって聞いてみたことがある。

「さっくん、彼女いないの？」

「……いない」

「えー、もったいない！さっくんかっこいいのに」

「……」

「私が彼女に立候補しよっかな」

冗談のつもりだった。いつもの軽いノリ。

なのに、さっくんの作業をする手が止まった。

「……本気で言ってるの」

低い声だった。いつもの塩対応じゃない。真っ直ぐに、こっちを見ている。黒い瞳が、何かを確かめるみたいに。

「え……」

心臓が跳ねた。空気が変わったのが分かる。さっきまでの軽い空気が、一瞬で張り詰めた。

(え、何……この空気……?)

もしかして、怒らせちゃったのだろうか。

「あ、いや——冗談だよ！そんなマジな顔しないで！」  
咄嗟にそう言って、笑って誤魔化した。

さっくんは一瞬だけ何か言いかけて——やめた。

「……注文は」

「あ、いつもの！」

いつも通りに戻った。何事もなかったみたいだ。

(……今の、何だったんだろ)

胸がドキドキしてるのは、きっと驚いたせいだ。さっくんが真面目な顔をするのが珍しかったから。それだけ。

でも私は、その日からほんの少しだけ、さっくんと距離の取り方が分からなくなった。前みたいに気軽に「好き」と言おうとする、あの真っ直ぐな目を思い出してしまふ。

——だから余計に、ふざけてしまっていた。

いつもより大げさに「さっくん大好き〜！」と言ってみたり、「推しが尊い」とわざとオタクっぽく騒いでみたり。軽いノリで上書きすれば、あの空気はなかったことにできる気がしたから。

推しは推し。それ以上を求めたら、この心地よい距離が壊れてしまふ。

——そう、思っていたのに。

「ねえねえ、ここのコーヒー美味しいんだよ！あと店員さんが推しなの！」

私は大学時代の友人——男友達を連れて、いつものカフェに来ていた。たまたま近くで会って、美味しいカフェがあるから寄っているよ、という軽いノリ。

「へえ、お前がそこまで言うカフェか。なんや楽しみやな」

「でしょでしょ！コーヒーも美味しいし、雰囲気もいいし、何より店員さんが最高なの！」

「推し店員ねえ……」

友人は笑いながら、店のドアを開けた。カランコロン、とベルが鳴る。

「いらっしやいませ」

さっくんの声。いつも通りの、愛想のない声。

「さっくん！今日もかっこいい！あのね、今日は友達連れてきたの！」

「……」

さっくんの視線が、一瞬だけ私の隣に立つ友人に向いた。すぐに戻って、いつもの無表情。

いつもなら注文の時にカウンターまで行くけど、今日は友人がいるのでそのまま窓際の席に座った。友人が向かいに腰を下ろす。しばらくして、さっくんが注文を取りに来た。

「ご注文は」

テーブルの横に立つさっくんの声が、いつもより低い気がする。

「私いつもの！あと——」

「俺、ブレンドで」

「ブレンド二つね、さっくん」

さっくんは無言で頷いて、カウンターに戻っていった。

コーヒーが運ばれてきた。いつもなら何か一言くらいは言ってくるのに、今日は無言でカウンターに戻っていった。

「で、推しの店員ってあの子なん？」

「そう！ かつこよくない？ 無愛想なところも可愛くて——」

「面食いなどこ変わらん」

「えー、顔だけじゃないよ？ さっくん推し過ぎて毎日通ってるもん」

「毎日……」

「え、引かないで？」

友人との会話が楽しくて、つい長居してしまった。大学時代の思い出話とか、共通の友達の近況とか。

「そういえばさ、最近ついに長年の片恋実らせたって？」

「こわっ。何で知ってるん」

「えー！マジ？てきとーに言ったただけなのに」

「お前ほんまええ性格しとんなあ」

「お祝いする？」

「遠慮しとくわ」

「じゃあ彼女の写真見せてよ」

「じゃあてなんなん」

「いいじゃん。同じサークルの子だったよね？」

「おう」

「見せて見せて」

友人は仕方なさそうにスマホを取り出して、彼女とツーショットの写真を見せてくれた。

「ラブラブ〜！いいね！」

「恥ずいわ」

二人でスマホを覗き込みながら笑い合う。

ふと視線を感じて、カウンターを見ると、さっくんと目が合った。けど、さっくんはすぐに目を逸らした。グラスを拭いている。

(……さっくん絡みに行かないから寂しがってたりして?)

なんて自分に都合のいいことを考えてしまう。そんなわけはないのに。

けど、なんだろう、今日のさっくんはいつもと違う気がする。

(——私、何かやらかしちゃった?)

胸がざわざわして、コーヒーの味がよく分からなくなった。

友人がコーヒーを飲み干して、席を立つ。この後、彼女とすぐ近くで待ち合わせてるらしい。

「ごちそうさん。美味かったわ」

「でしょ？また来てね」

「いや、俺はもう来おへんかな」

「え、なんで？」

「……なんとなく」

友人は曖昧に笑って、それから少しだけ間を置いた。

「……お前さ。あの店員のこと、本当に『推し』としか思っていない？」

「え？うん、推しだよ」

「……ふうん……ま、頑張りや」

それだけ言って、友人は席を立った。カウンターで会計を済ませている。私の分も、と財布を出しているのが見えて、慌てて追いかけた。

「あ、私の分は——」

「ええって」

友人がさっくんに「ごちそうさん」と言った。さっくんは「ありがとうございました」と返した。いつも通りの、愛想のない声。

——でも、お釣りを渡す時、さっくんは一度も友人の顔を見なかった。

カランコロン。友人が出ていった。

(何だったんだろう、今日)

さっくんの態度も、友人の言葉も、よく分からなかった。

その翌日。

私は仕事帰りにいつもと同じようにカフェに向かった。昨日のこ

とが気になって、一日中そわそわしていた。

(私、何かさっくんに嫌われること、した……?)

そう思うと、胸がざわざわする。仕事でもどこか上の空で、仲の良い同僚に「今日どうしたの?」と心配された。

しかも、そんな日に限って、仕事が終わらない。必死に残業したけど、いつもの時間よりもずいぶん遅くなってしまった。

(早く会いたい。さっくんの顔が見たい)

いつもの道。いつもの景色。心臓がどきどきして落ち着かない。

(……塩対応なんて、いつものことなのに……)

結局お店に着いたのは、閉店三十分前。店内にはお客さんは誰もいなくて、カウンターの向こうにさっくんだけがいた。マスターの姿はない。

「いらっしやいませ」

いつも通りの、愛想のない声。でも今日はどこか硬い気がして

「さっくん……あの、もしかして……昨日何か怒らせちゃった？」  
単刀直入に聞いた。さっくんは一瞬だけ私を見て、すぐに目を逸らした。

「別に」

「嘘。態度違ったじゃん、昨日。今日も」

「……気のせい」

「気のせいじゃないよ。ねえ、ちゃんと教えて？何か悪いことした？」

「……してない」

さっくんがカウンターの中で背を向けた。閉店準備を始めている。私を無視するように。

(さっくん、確かに塩対応だけど、こんなふうは無視するなんて

……)

「ねえ——」

「今日はもう閉店するから」

「まだ三十分あるよ？」

「……帰ってくれ」

帰ってくれ。いつもの冷たい「帰れ」じゃない。「くれ」がついてる。

——まるで本気で遠ざけようとしてるみたいに。

(何か、おかしい。いつものさっくんじゃない)

「やだ」

「……」

「帰らない。さっくんが怒ってる理由、教えてくれるまで帰らな

い」

「怒ってない。——帰れ」

あ、戻った。「帰れ」に。でも声が低い。いつもの面倒くさそうな「帰れ」じゃない。

さっくんがカウンターから出てきた。入り口のドアに向かう。私を送り出そうとしている。私は慌ててその背中を追いかけた。

「さっくん」

「……」

「さっくんってば」

「……」

「ねえ、無視しないでよ」

さっくんの手がドアノブにかかった。扉を開けようとしている。

「さっくん、私のこと嫌いになったの？」

私の言葉にさっくんの肩が、びくつと震えた。ドアノブを握ったまま、動かない。

私はさっくんの言葉をじつと待つ。

「……嫌いになれたら楽だったのにな」

さっくんが、聞こえるか聞こえないかくらいの声でポツリと呟いた。

「……え？」

「——何でもない。帰れ」

「何でもなくないよ。今の、どういう意味？」

「……」

「ねえ、ちゃんと——」

「頼むから帰ってくれ」

絞り出すような声だった。さっくんの手が、ドアノブの上で白く

なるほど握り込まれている。

——怒ってるというより、どこか苦しそうで。

(さっくん——)

気づいたら、さっくんの袖を掴んでいた。

「帰りたくない」

「……」

「さっくんがそんな顔してるのに帰れないよ」

さっくんが振り返らない。ドアノブを握ったまま。私は袖を掴んだまま。

長い沈黙が落ちた。

ドアの向こうを、誰かの足音が通り過ぎていった。それだけが、やけに遠く聞こえた。

——ついに、さっくんの手が動いた。

扉を開けるのかと思つた。けれど、違つた。

カチャリ。

扉の鍵を閉める無機質な音が静かな店内に響き渡つた。

(——え?)

さつくくんが、こつちを向いた。非常灯の薄暗い光の中、黒い瞳だけがやけにはつきり見える。

いつもの無表情じゃなかつた。

——見たことない目だつた。怒っているのか、泣きそうなのか、分からない。そんな目。

「さつく——」

唇を塞がれた。

一瞬、何が起きたのか分からなかつた。

冷たかつたさつくくんの唇が、私の唇に押し付けられている。

(え、なに……?)

理解する前に、舌を割り込まれた。歯列をこじ開けられて、舌を絡め取られる。吸われて、噛まれて、奥まで蹂躪される。深い。苦しい。怒ってるみたいなきスだった。息継ぎの隙間すら与えてくれない。

「ん……っ♡ん……♡♡」

息ができない。背中がドアに押し付けられている。さっくんの手が後頭部を掴んで、離れられないように押さえつけてくる。

(キスしてる——さっくんが——私に——)

何が起きてるか分からない。分かるのは、さっくんの唇が熱いことと、執拗に舌が絡みついてくることだけ。

「ん……っ♡ふ、あ……♡♡」

唇が離れた時、私は息を切らしていた。唾液が二人の間で糸を引

いて、ふいに途切れた。

さっくんの目が、すぐ近くにある。熱を帯びた黒い瞳。荒い呼吸。

「さ、さっくん——」

「俺はあんたの何なんだよ」

低い声。さっくんの声が震えている。

「え……」

「推しって何なんだよ」

「さっくん——」

「毎日来て、好き好き言って、笑って。——それで、本気じゃないんだ」

「本気って——」

「俺はあんたの何なんだよ。推し？ 暇つぶし？ からかって楽しい相手？」

「そんなんじゃない——」

「じゃあ何だよ」

さつくんの声が震えていた。怒っているのに、それだけじゃない感情が混じってる。

推し。ずっとそう思ってた。でも今、こんなキスされて、こんな顔で見つめられて。この鼓動が「推し」に対するものなのか、それとも——

「……わかんない」

けれど、今の私は、正直にそう答えるしかなかった。

ここで、いつものように「推し」って言うのもなにか違う気がして——

「わかんないって何だよ」

「ごめん……でも、今は本当に、わかんない……」

「……っ」

さっくんの手が、私のブラウスの襟元に触れた。

「じゃあ——わからせてやる」

「え——」

ボタンに指がかかった。一つ外される。

「ちよ、さっくん——」

二つ目。鎖骨が露わになる。さっくんの指が、そこに触れた。冷たい指先が肌を滑って、鳥肌が立つ。

「ん……♡」

三つ目のボタンが外されて、ブラウスが開いた。下着が見える。

さっくんの目が、一瞬だけそこに落ちて——喉が動いた。

「……見ないで……♡」

「あんたの指図は受けない」

下着の上から、手のひらが触れた。

もにゆ♡

「ん……っ♡」

大きな手で、包み込むように。ゆっくり形を確かめるみたいに揉まれる。

くにつ♡もにゆ♡

「あっ……♡さっくん……♡♡」

下着がずらされた。直接、手のひらが胸に触れる。

くにゆ♡

「んっ……ちよ、さっくんってば……♡♡」

「……柔らかい」

「……っ♡」

親指が先端を見つけた。硬くなりかけた乳首を、くりっと押され

る。

「ふあっ……♡」

「ここ、もう硬くなってる」

「やっ……そんな……♡」

片方の胸を手のひらで揉みながら、親指で先端を転がされる。なんだか頭がふわふわしてきて逃れようとするけれど、ドアに押し付けられているため、逃げ場がない。

くにゅ♡くりくり♡

「んっ♡あっ♡さっくん……♡」

(さっくんが……私を……これ、夢……?)

けれど、ドアの冷たさと、さっくんの手の熱さが同時に背中と胸にあって、これが現実なんだと教えてくれる。

さっくんの指が乳首を摘み、ぐいっとやさしく引っ張られる。

「ひっ……♡引っ張らないで……♡」

返事の代わりに、もう片方も摘まれた。両方の乳首を同時に、くりくりと指先で弄ばれる。

くりくり♡つつん♡さすさす♡

「やっ♡あっ♡だめっ……♡」

さっくんの顔が近づいてきた。胸元に。まさか、と思った瞬間——唇が先端に触れた。

ちゅ♡

「ひうっ♡」

舐められた。舌先でちろちろと転がされる。片方を口に含みながら、もう片方は指で転がし続けてる。

れろ♡くりくり♡

「んっ♡あっ♡舌でっ……♡さっくん……♡♡」

吸われた。先端を唇で挟んで、きゅっと。

ちゅぱ♡ちゅぱ♡ぢゅう♡

「ひあっ♡そ、そんな強く吸わないでえ……♡」

吸いながら舌で弾かれる。歯で軽く甘噛みされて、また吸われ。休む間がない。

ちゅぱちゅぱ♡ちゅぱちゅぱ♡れろれろろ♡♡

「んっ♡あっ♡やっ……♡そこ、んぐう……♡」

(こんなの……胸だけで、おかしく……♡)

吸って、舐めて、甘噛みして。指と口が入れ替わりながら、両方の先端を延々と弄り続けている。下半身に何も触れてないのに、お腹の奥がじわじわ熱くなっている。

「やっ♡さっくんっ♡胸だけで……なんかへん……♡」

——膝が震えてるのが、自分でわかった。膝が折れかけたのに気

付いたさっくんの腕が腰を支えてくれる。

「……立ってられないのか」

「だって……♡さっくんが……♡」

「……抵抗しないんだな」

さっくんに持ち上げるように抱えられて——運ばれていく。

「え、ちよっ——」

窓際のソファ席に、降ろされた。いつもの場所。いつもコーヒーを飲んでいた場所。ブラウスをはだけた格好で、いつもの席に座らされている。

「ここで、いつも俺のこと見てたよな」

さっくんが、ソファの前に膝をついた。私の膝に手をかけて、押し開こうとする。

「っ——ちよっと、さっくん——」

「あんたが俺を弄んだんだ。だから俺も好きにさせてもらう」  
それだけ言うと、スカートを捲り上げられた。太ももが露わになる。下着の上から、指が触れた。

くちゅ♡

「ひっ……♡」

「……濡れてる」

(……さっき、触られたので……♡)

指が布越しに動く。一番敏感な場所を探るように。見つけた瞬間、容赦なく押された。

ぐっ♡

「ひあっ♡」

確かめるように何度か押された後、下着がずらされた。直接指先がクリトリスに触れる。

ぬるっ♡

「んうっ……♡さっくん、だめえ……♡♡」

思わず私の股の間にしゃがみ込むさっくんの頭を両手で押し返した。

さっくんと目が合う。その目が据わっている。いつもの知的で冷静なそれではなかった。抑えてたものが全部剥き出しになったような目だった。

私の手の力じゃあ、さっくんを抑えられない。ろくに抵抗もできず、膝を押し広げられた。さっくんの顔が、脚の間に沈んでいく。

「ちょ——さっくん、そこは——」

返事はなかった。その代わりに下着を剥ぎ取られ——

れろ♡

「ひあっ♡」

熱い。濡れた何かが直接接触した。——舌だ。さっくんの舌が、一番敏感なところに。

れろ♡ちゆる♡

「あっ♡んっ♡さっくん、ほんとにダメだっつっ……♡♡」  
声をかけても返事がない。聞こえてないみたいなのに、舌だけが動き続けている。

(さっくん……様子がおかしい……♡♡)

突起を唇で挟まれた。吸い上げながら舌先で弾かれる。

ちゅぱ♡♡ちゅぱ♡♡ちろちろ♡♡れろれろ♡♡

「あっ♡ひっ♡♡ン、それやらあっ♡♡」

吸われるたびに、奥からじわっと熱いものが湧いてくる。止められない。自分の意思とか関係なく、勝手に溢れてくる。

(やっ♡♡どんどん溢れて……♡♡)

さっくんの舌が、クリトリスから離れた。じゅ、じゅと啜りながら下りてきて——溢れてくる入り口に吸いついた。

ぢゅううッッ♡♡

「んあッッ♡♡♡」

（舐め取ってる——溢れてるの、全部——）

入り口を舌先でなぞられる。溢れた分を掬い上げるみたいに、ゆっくりと。さっき激しかったのが嘘みたいに、丁寧舐め取っていく。

れろ♡れろ♡ちゅぱ♡ちゅぱ♡

「んっ♡あっ♡♡」

でも丁寧なのは舐め取ってる間だけだった。全部を掬い終わった瞬間、またクリトリスに戻ってきて強く吸い上げられた。

ぢゅるるるるッッ♡♡